

## **ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN *CHINJUTSU NO FUKUSHI* LEVEL *CHUUJOKYUU* DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG**

Diwana Fikri Aghniya, Susi Widianti, M.Pd. M.A., Dr. Herniwati, M.Hum  
[diwanafikriaghniya@gmail.com](mailto:diwanafikriaghniya@gmail.com)

### **ABSTRAK**

Penelitian ini merupakan penelitian yang membahas tentang analisis kesalahan penggunaan *chinjutsu no fukushi* dalam kalimat bahasa Jepang yang dilakukan oleh mahasiswa Semester 7 Departemen Pendidikan Bahasa Jepang Universitas Pendidikan Indonesia. Tujuan penelitian ini adalah untuk mengetahui tingkat kesalahan yang dilakukan mahasiswa dalam penggunaan *chinjutsu no fukushi*, jenis kesalahan yang muncul serta faktor penyebabnya. Metode yang digunakan dalam penelitian ini adalah metode deskriptif. Instrumen yang digunakan untuk memperoleh data yaitu instrument tes dan angket. Teknik pengumpulan data yaitu dengan teknik *one shoot model*, yaitu dengan pengambilan data yang dilakukan satu kali dalam satu waktu. Sampel dalam penelitian ini yaitu mahasiswa semester 7 Departemen Pendidikan Bahasa Jepang Universitas Pendidikan Indonesia sebanyak 20 orang dengan menggunakan teknik purposive sampling. Berdasarkan hasil penelitian diketahui bahwa kesalahan secara menyeluruh mencapai 62,86%. Jenis kesalahan umum yang muncul adalah kesalahan kompetensi. Faktor penyebab terjadinya kesalahan terdiri dari faktor internal, serta faktor yang berasal dari sulitnya materi *chinjutsu no fukushi* itu sendiri.

Kata kunci: analisis kesalahan, *fukushi*, *chinjutsu no fukushi*, *chuujoyuu nihongo*

## **ERROR ANALYSIS OF THE USE OF JAPANESE ADVERB *CHINJUTSU NO FUKUSHI* FOR *CHUUJOKYU* LEVEL IN JAPANESE SENTENCES**

Diwana Fikri Aghniya, Susi Widianti, M.Pd. M.A., Dr. Herniwati, M.Hum  
[diwanafikriaghniya@gmail.com](mailto:diwanafikriaghniya@gmail.com)

### **ABSTRACT**

This research explain about error analysis of the use of Japanese adverb *chinjutsu no fukushi* in Japanese sentences by students of semester 7 of Japanese Language Education Department of Indonesia University of Education. The purpose of this study was to determine how much the percentage of error, what kind of error and what factors that caused the error. The method whish used in this research is descriptive method types. The instruments which used to obtain the data are tests and questionnaires. Data collection technique that is used in this research is “one shoot model”, with data retrieval to be done once at a time. The sample in this research is 20 students of semester 7 of Japanese Language Education Departement of Indonesia University of Education who selected by purposive sampling technique. Based on the results of this research, for overall, the percentage of error of the use of Japanese adverb *chinjutsu no fukushi* is approximately 62,86%. The general type of error is the error by lack of competency. Factors that caused the occurrence errors are internal factors, eksternal factors and difficulties of the use of *chinjutsu no fukushi* itself.

Keywords: error analysis, *fukushi*, *chinjutsu no fukushi*, *chuujoyuu nihongo*

Diwana Fikri Aghniya, 2017

ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN *CHINJUTSU NO FUKUSHI* LEVEL *CHUUJOKYUU* DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG

Universitas Pendidikan Indoensia | [repository.upi.edu](http://repository.upi.edu) | [perpustakaan.upi.edu](http://perpustakaan.upi.edu)

日本語の文に中上級レベルの陳述の副詞の誤用分析  
(インドネシア教育大学日本語教育学科の第七学期の学生に対して)

Diwana Fikri Aghniya, Susi Widiанти, M.Pd. M.A., Dr. Herniwati, M.Hum  
[diwanafikriaghniya@gmail.com](mailto:diwanafikriaghniya@gmail.com)

### 要旨

本研究では、インドネシア教育大学日本語教育学科の第七学期の学生に対して、陳述の副詞の誤用について調べた。本研究の目的は誤用率及び誤用の程度、誤用の種類、と誤用の原因を明らかにするためである。本研究の方法は記述法（デスクリプト法）である。データを収集するために、テストとアンケートを使用した。対象者はインドネシア教育大学日本語教育学科の第七学期の学生であり、サンプルは有意抽出法というデータの収集技法で選択した20人の日本語学生である。本研究の結果によると、全体的な誤用率は62,86%である。誤用の種類は能力が不足のためである。誤用の原因は学習者からの原因、学習者の環境からの原因、陳述の副詞の難しさの原因である。

キーワード：誤用分析、副詞、陳述の副詞、中上級日本語

## 1. 初めに

### 1. 1. 背景

日本語の副詞は様々な種類に分ける。日本語の副詞の一つとして、陳述の副詞である。松岡と田窪（ジュディアスリ、2007）により、陳述の副詞は後ろに特別なモダリティや表現などを伴う副詞であり、述語にかかる修飾語として用いられる。

陳述の副詞の種類は非常に多い。高見沢（ジュディアスリ、2007）は陳述の副詞を七つの種類に大きく分けた。

- a. 断定（例：きっと、かならず、絶対）
- b. 打ち消し（例：まったく、さっぱり、けっして）
- c. 例え（例：まるで、あたかも、さも、いかにも）
- d. 推量（例：どうやら、たぶん、もしかして）
- e. 疑問（例：どう、どんな、いったい、はたして）
- f. 願望・希望（例：どうぞ、どうか、ぜひ）
- g. 仮定（もし、たとえ、まんいち）

陳述の副詞の種類が非常に多く、後ろに特別なモダリティや表現などを伴うため、日本語学習者は陳述の副詞を使用する際に、誤用が多いだらう。

**Diwana Fikri Aghniya, 2017**

*ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG*

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu

上記の背景に基づいて、筆者はインドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用を分析し、誤用の程度や誤用の種類や誤用の原因などを明らかにする。

### 1. 1. 研究の問題

本研究の問題は次の通りである。

- a. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用はどれだけ誤用があるのか。誤用の割合はいくら。
- b. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用の種類は何か。
- c. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用の原因は何か。

### 1. 3. 研究の目的

- a. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用の割合を明らかにするためである。
- b. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用の種類を明らかにするためである。
- c. インドネシア教育大学日本語教育学科の第7学期の学生に対する陳述の副詞の誤用の原因を明らかにするためである。

## 1. 4. 先行研究

本研究する前に陳述の副詞についてと関係ある論文を調べた。その論文の題名は「きっと」と「必ず」を使用する能力の分析である。研究者は ヌヌ・グスティ・セプティアニである。その論文の研究の結果によると、学習者の陳述の副詞を使用する能力の比率はただ52、945%である。つまり、結果があま良くないと言える。きっととかならずという副詞はただの二つの陳述の副詞である。他の陳述の副詞が非常に多いが、陳述の副詞についての研究は全くない。

## 2. 研究の方法

### 2. 1. 研究の方法

本研究の方法はデスクリプト法である。デスクリプト法という分析方法は問題を解決するためにいくつかの可能性を検討し、データを収集し、解決する方法である。ステディ(2011: 58)によると、デスクリプト法は現在に起こっている状態を額的に述べ、記述する。つまり、インドネシア教育大学日本語教育学科の第七学期の学生に陳述の副詞の誤用を記述する。本研究はというデザインを用いる。本研究の方法は次のようである。

#### a. データを収集する。

本研究はデータを集めるためにテストとアンケートを行う。

#### b. データを分析する。

アンケートとテストの結果から、データを分析する。

#### c. 結論

**Diwana Fikri Aghniya, 2017**

**ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG**

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu

研究のデータを分析した結果から結論する。

## 2. 2. 研究の時期及び対象者

本研究は2017年10月4日に実施し、インドネシア教育大学日本語教育学科の第七学期の学生から20名を対象にワンシュートモデルによるテストとアンケート調査が行われた。テストをやるために、60分の期間が与えられた。アンケートをやるために、期間の限定はない。

## 2. 3. 研究の用具

本研究では、データを収集するために、35問のテストと10問のアンケート調査行われた。

## 2. 4. データ分析方法

- a. データをチェックする
- b. 誤用の種類を区別する
- c. 誤用の回数によって誤用の種類を
- d. 誤用の原因を分析する
- e. 分析した結果から結論を立てる

## 3. 研究の結果

**Diwana Fikri Aghniya, 2017**

*ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG*

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu

### 3. 1. 誤用の割合

全体的に誤用の割合は62、86%である。陳述の副詞の誤用の割合は次の表の通りである。

陳述の副詞の種類	陳述の副詞	番号	X	F	割合
打ち消し	めったに	1	20	10	50%
	けっして	9	20	14	70%
	ちっとも	17	20	16	80%
	かならずしも	22	20	13	65%
	ゆめにも	35	20	15	75%
推量	どうやら	2	20	11	55%
	多分	10	20	11	55%
	おそらく	15	20	16	80%
	さぞ	27	20	11	55%
	もしかして	34	20	12	60%
疑問	どれだけ	3	20	14	70%
	いったい	13	20	8	40%
	はたして	16	20	17	85%
	いかに	24	20	17	85%
	なんとか	33	20	13	65%
仮定	かりに	4	20	14	70%
	まんいち	8	20	15	75%
	もし	21	20	7	35%
	たとえ	23	20	12	60%
	どんなに	32	20	14	70%

Diwana Fikri Aghniya, 2017

ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu



願望・希望	どうぞ	5	20	8	40%
	どうか	11	20	13	65%
	なんとか	20	20	16	80%
	ぜひ	28	20	9	45%
	きっと	31	20	6	30%
例え	ちょうど	6	20	11	55%
	まるで	12	20	10	50%
	あたかも	18	20	16	80%
	さも	25	20	15	75%
	いかにも	30	20	15	75%
断定	きっと	7	20	11	55%
	かならず	14	20	9	45%
	ぜったい	19	20	8	40%
	もちろん	26	20	16	80%
	きまって	29	20	17	85%

陳述の副詞の種類を区別し、誤用の比率は次の表の通りである

No	陳述の副詞の種類	X	F	割合
1	打ち消し	100	68	68%
2	推量	100	61	61%
3	疑問	100	69	69%
4	仮定	100	62	62%
5	願望・希望	100	52	52%
6	例え	100	67	67%

Diwana Fikri Aghniya, 2017

ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu

7	仮定	100	61	61%
---	----	-----	----	-----

### 3. 2. 誤用の種類

- a. 全ての陳述の副詞の種類に誤用がある。
- b. チョムスキの理論によると、回答に出た誤用の種類は言語能力の誤用である。
- c. コルダーの理論によると、回答に出た誤用の種類はエラーとミステークである。
- d. リチャードとフェイスクの理論によると、回答に出た誤用の種類は *incomplete application of rules* と *false concept hyphothesized* である。
- e. タリガンの理論によると、回答に出た誤用の種類は意味的な誤用とシンタックス的な誤用である。
- f. セリンカーの理論によると、回答に出た誤用の種類は *interlingual mistakes, overgeneralization, error of avoidance* である。

### 3. 誤用の原因

誤用の原因は学習者からの原因、学習者の環境からの原因、陳述の副詞の難しさの原因である。

### 4. .終わりに

分析の結果によると、誤用の割合や誤用の種類や誤用の原因は明らかになった。全体的に誤用の割合は62、86%である。全ての陳述の副詞の種類に誤用がある。チョムスキの理論によると、回答に出た誤用の種類は言語能力の誤用である。コルダーの理論によると、回答に出た誤用の種類はエラーとミステークである。

**Diwana Fikri Aghniya, 2017**

**ANALISIS KESALAHAN PENGGUNAAN CHINJUTSU NO FUKUSHI LEVEL CHUUJOKYUU DALAM KALIMAT BAHASA JEPANG**

Universitas Pendidikan Indoensia | repository.upi.edu | perpustakaan.upi.edu

リチャードとフェイスクの理論によると、回答に出た誤用の種類は *incomplete application of rules* と *false concept hyphothesized* である。タリガンの理論によると、回答に出た誤用の種類は意味的な誤用とシンタックス的な誤用である。セリンカーの理論によると、回答に出た誤用の種類は *interlingual mistakes, overgeneralization, error of avoidance* である。誤用の原因は学習者からの原因、学習者の環境からの原因、陳述の副詞の難しさの原因である。

## 5. 参考文献

ジュディアスリ・メリアデウィ. (2007) 「日本語の副詞を知る」. [オンライン] リンク : [http://file.upi.edu/Direktori/FPBS/JUR.\\_PEND.\\_BAHASA\\_JEPANG/196105061987032-MELIA\\_DEWI\\_JUDIASRI/adverbia.pdf](http://file.upi.edu/Direktori/FPBS/JUR._PEND._BAHASA_JEPANG/196105061987032-MELIA_DEWI_JUDIASRI/adverbia.pdf)

増岡と田窪 (1989). 「基礎日本語文法」 日本 : 黒潮.

ステディ・デディ (2011). 「日本語教育の研究」. バンドン : フマニオラ・ウタマ・プレス.